口蓋裂児の両親における顎顔面形態

昭和大学歯学部　　栄　崎　好　伸

口蓋裂患者の顎顔面形態が極めて特異的であることは、従来の多くの研究で指摘されてきたところである。就中、上顎の劣成長は骨格性下顎前突の主因として、歯科矯正臨床上最も注目すべき特徴である。すなわち、不正咬合のseverity（重篤度）の観点から、上顎の劣成長による位置的後退が大きければ大きい程矯正治癒が難かしく、severityが高い。

形成手術の術者は、しばしば全く同じ裂型組織欠損量（裂の大きさ）の２個体について、同一手術法および時期に手術を行うたにもかかわらず、それ以後の両者の上顎における劣成長の差異にがく然とするという。この原因は、上顎に加えられた外科的処置に対する成長への影響が個々に異なることにある。

そこで、上顎の成長を左右する因子として家族性（血族性）を仮定し、口蓋裂児とその両親との間の顎顔面形態における関連性を明らかにすることを目的として調査を行った。

まず、唇顎口蓋裂男児および女児各３０名を発端者とし、その両親よりえた１１８枚の頭部ｘ線規格写真を分析した結果、父親群、母親群ともにその顎顔面頭蓋の形態は、成人唇顎口蓋裂患者のそれと類似性を示すことが認められた。すなわち、頭蓋基底角の開大、上顎骨長径および高さの短小、下顎骨各部の短小、下顎角と下顎下縁角の開大などがあり、その傾向は父親群により強く表われた。

次いで、唇顎口蓋裂児と両親との顎顔面各部の相関性を検討した結果、女児発端者群一父親群で上顎骨長径（０.５７８）、上顎骨後縁の高さ（０.５４５）、下顎枝高（０.５５９）に１％有意水準また上顎骨前縁の深さ（０.４１６）、上顎骨後縁の高さ（０.４６３）、下顎骨長（０.４２０）に５％有意水準の相関が認められた。そのほか女児発端者群一母親群で、全頭蓋基底長（０.４９２）、上顎後縁の深さ（０.４６３）、下顎骨長（０.４５４）に５％有意水準の相関がそれぞれ認められた。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

口蓋裂患者の顎顔面形態が極めて特異的であることは、従来の多くの研究で指摘されてきたところである。就中、上顎の劣成長は骨格性下顎前突の主因として、歯科矯正臨床上最も注目すべき特徴である。すなわち、不正咬合の severity(重篤度)の観点から、上顎の劣成長による位置的後退が大きければ大きい程矯正治癒が難かしく、severity が高い。